



上—ラグナー・キヤータンソン
「訪問者たち」展より
《訪問者たち》(2012)の映像スチル
下—ラグナー・キヤータンソン
「訪問者たち」展示風景

Courtesy of the artist and Lühring
Augustine, New York



チェルシー20丁目にオープンした
デイヴィッド・ツヴィルナー画廊の
新ビル全景
Photo by Jason Schmidt

オ・ジョオ風絵画で知られるが、近年、その引用の矛先は自らの作品、いや自らの不運なキャリアに向けられている。MoMA開催の「デイヴィッド・ディアオ」回顧展の案内状や、自作の図版が掲載されたオークション・カタログのページなど、虚々実々のシミュレーション絵画の数々。名声や作品価格が幅を利かすアート界への皮肉たっぷりの警鐘であると同時に、成功を求める作家の本音の部分も見え隠れし、切なくも苦笑するアートとなっている。

ところで、この春、ダントツの人気を集めた画廊展と言えば、大胆、奔放、人を食ったパフォーマンスで知られるアイスランドの作家ラグナー・キヤータンソンの映像インスタレーションだ。ギャラリーの中央に表裏2面のスクリーンが下がり、壁の一周には7面のプロジェクション。それぞれ、チェロやピアノ、アコーディオンなど、演奏者が登場し、同じひとつのセンチメンタルなフレーズが楽器と和声とで

延々繰り返される。絶叫調あり、バラードあり、延々64分飽きさせないその変奏の妙もさることながら、9人の演奏者は同じ家の居間や書斎、寝室など、別々の部屋にいて、しかもびったりシンクロしている。

作家本人は、バスタブで湯につかりながらギターをつま弾き、ときおり素っ裸で歩いたりする。NY郊外の農場にある、築200年、43室もあるという朽ち果てた屋敷を舞台にしたこの音楽劇、演奏終了後は、皆が集まってビールを一杯やり、やがて外へ出て丘の麓へと消えていく。なんとも自由でボヘミアン。現代の桃源郷だ。それが「創る」ということか。見ているほうも部屋から部屋へと知らぬ間に演奏者を追い、観客同士、不思議な一体感を味わる作品となっている。映像と音楽、パフォーマンスとコラボレーションが結びついた会心作。ビヨークの従兄弟とも言われるキヤータンソン、負けず劣らずの器のようだ。

ラグナー・キヤータンソン

「訪問者たち」展

Ragnar Kjartansson:

The Visitors

2月1日~3月9日

ルーリング・オーガスティン画廊

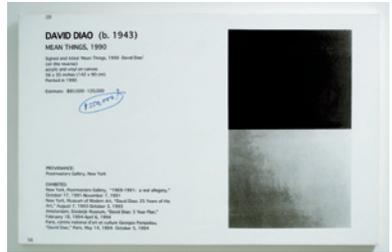
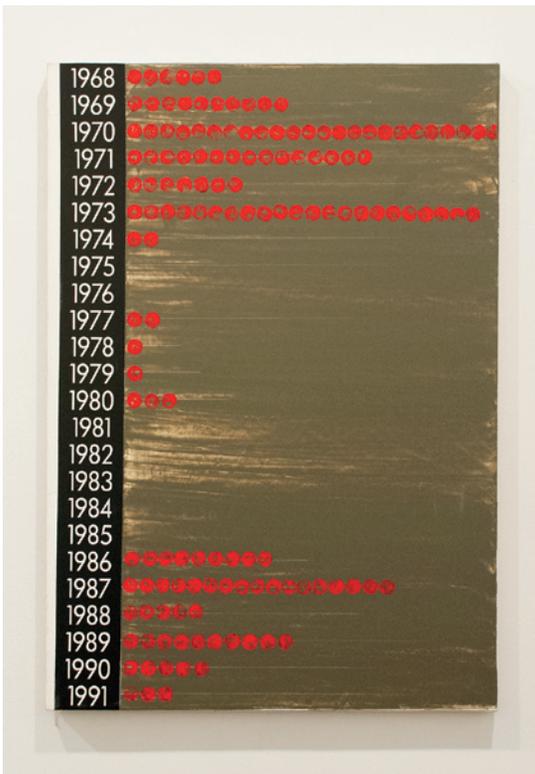
Lühring Augustine

* 531 West 24th Street,
New York

Tel. +1-212-206-9100

10:00~18:00

日休



デイヴィッド・ディアオ「TMI」展より
 左——売り上げ 1991
 右上——オークション記録 2011
 右下——画歴40年 2013
 Courtesy of Postmasters Gallery, New York

地価高騰に分かれる明暗 チェルシーの画廊街に大変動

New York

ニューヨーク

藤森愛実=文

Text by Manami Fujimori
 (Art Writer)

デイヴィッド・ディアオ「TMI」展

David Diao:
 TMI (Too Much Information)
 3月23日～4月27日
 ポストマスターズ画廊
 Postmasters Gallery
 * 459 West 19th Street,
 New York
 Tel. +1-212-727-3323
 11:00～18:00
 日休

今年に入って大きな話題と言えば、やはりデイヴィッド・ツヴィルナー画廊の躍進に尽きるだろう。ガゴシアン画廊を離れた草間彌生を迎え入れ(引き抜き?)、5月には、ジェフ・クーンズの新作展を開催。さる2月にオープンしたNY2店舗目、5階建ての新ビルは、1・2階のギャラリーから3～5階のオフィス、屋上の野外彫刻用スペースまでと、美術館クラスの規模を誇る。ガゴシアンを抜くか抜いたかといった、外野席の声もやかましいが、オープン記念展には دونالد・ジャッドとダン・フレイヴィンのミニマル彫刻が並び、手堅い展示を見た。この新スペースでは今後も、物故作家の展覧会が中心になるという。いわばセカンダリー・マーケットが前面に押し出された格好だ。

現代美術の画廊といえば本来、プライマリー(現存作家の新作)が売りだったが、実際のビジネスを成り立たせているのはセカンダリーの作品である。メガス

ペースを背景にした大手画廊のこうした展開に加え、ジャン・ヌーベルやアナベラ・セルドルフらスター建築家による高級マンションが建ち並び、チェルシーはいま、地価高騰が基だしい。

そんな中、この道30年の中堅画廊ポストマスターズがチェルシー撤退を決め、ニコール・クラグスプラン画廊は閉鎖を発表。前者の場合、古巣のダウンタウンに新スペースを物色中というから、あながち暗いニュースとは言えないが、画廊オーナーは「これまでの2倍、月額300万円もの家賃を払う気はない。このふんどしと中堅画廊の多くはチェルシーから消えてしまう」と発言。画廊街の空洞化を予測させるものとして、大きな波紋を呼んだ。

ともあれ、チェルシー最後の展覧会を飾ったのは、ポストマスターズ画廊以来の取り扱い作家であるデイヴィッド・ディアオだ。画歴40年のベテランで、パーネット・ニューマンら過去の大家の引用によるネ